

熱い夏 沖縄・七五年ひめゆり闘争前後

あかぎ まもる
赤城護 共産同「統一委員会」

七二年沖縄「返還」の頃とその後

沖縄「返還」の時、僕は高校三年生だった。二年生の秋から政治闘争に参加し、赤ヘルメットをかぶった。八派共闘が解体して「沖縄奪還」を掲げる中核派等と「返還」粉砕を掲げる沖共闘に分裂した後だ。七一年秋の連日の批准国会に合わせた集会・デモ、催涙ガスの痛みなどが、今となっても記憶に生々しい。批准国会では、「沖青同」——中核派系の在「本土」沖縄人組織

覧会が開催されることが予定され、その名誉総裁として皇太子（当時、以下同）アキヒトの沖縄上陸が発表されていた。戦犯天皇ヒロヒトの名代として、戦後唯一「行幸」をなしえなかつた沖縄へ初めて上陸するというのである。沖縄の地場産業を解体する海洋博はもちろん反対だが、それにも増して皇太子の沖縄上陸は許し難い。そんな思いで5・15の三周年を迎えようとしていた僕は、数日前から沖縄にいた。以下は僕の体験談である。

一九七五年五月一五日、沖縄は「返還」から三周年を迎えた。わずか三年で、「祖国復帰」の幻想は急速に醒めていったように思う。「ヤマトウ世からアメリカ世へ、アメリカ世からヤマトウ世へ」と、フォークソング・シンガーの佐渡山豊は歌った。「核抜き・本土並み」の期待は裏切られ、米軍基地は沖縄に集中し、加えて自衛隊も来た。「沖縄は差別されている」との思いが募っていた。

この年は七月二〇日から沖縄海洋博



沖縄人民とともに、海洋博決戦の大爆発かちとる

沖縄 羽田を貫き、三日の死闘に完全勝利

（本紙）

二戦士、第一弾を

である「沖青委」から分かれた青年たちが中心——三人が国会傍聴席で爆竹を鳴らし、逮捕されて「返還」に抗議した。「返還」前々日には、僕ら戦旗派は逮捕者約一三〇名を出す神田武装遊撃戦を敢行した。逮捕されれば退学間違いなしだが、僕はどのように逮捕を免れた。

5・15「返還」当日の集会は、5・13神田武装遊撃戦の熱気が残り、「返還」粉砕への思いを強くした。沖青同の「返還」に対する糾弾が印象的だった。沖青同といえば、戦旗派は彼らから糾弾をうけている。七一年当時の沖縄闘争論には「本土」と沖縄の関係について差別——被差別の観点がなかったことが批判されたのだ。確かに、米軍基地と自衛隊基地の軍事的問題ばかりが主題化され、差別・抑圧の問題は取り上げられていなかった。

沖青同の糾弾を受けて戦旗派は、レーニンの「民族・植民地問題」に関する提言を基に「本土」——沖縄関係を

抑圧―被抑圧関係としてとらえるようになった。僕は高校の新聞で沖繩「返還」に一文を寄せ、基地問題と並んで差別問題を提起した。

「返還」後は、夏から秋にかけて相模原補給廠闘争(米軍戦車を止めた闘い)があり、七三年には僕らにとつては重要な意味をもつ荒派(日向派)との分派闘争があつた。七四年は狭山差別糾弾闘争がかつてない規模で盛り上がった。が、狭山闘争については他の人が書くだろうから、ここでは省略する。

七五年―熱い夏

5・15三周年の少し前、僕は数名の仲間とともに沖繩に行つた。「海洋博」と「皇太子」をめぐる議論が白熱していた。いくつかの大手労働組合は、上部組織(それはもっぱら「本土」にあつた)の制動を跳ね返して「海洋博粉砕」「皇太子来沖阻止」の決議をし、職場に立看を出した。「新沖繩文学」は天皇制の特集号を出し、皇太子の沖

繩上陸に警鐘を鳴らした。

5・15の直前、僕らは「ステ貼り」(スローガンと組織名を印刷したものを電柱や壁に貼ること)で逮捕された。留置所の同房者は「海洋博はろくなことないよ」「皇太子は来ないほうがいい」と漏らしていた。5・15当日はデモで逮捕された革マル派(琉球大だが鹿児島出身)が房に入ってきたが、彼は海洋博も天皇制も無関心だった。逮捕の前後、しばらく、海洋博の開かれる本部半島でピラ配りやキビ狩りの援農をした。ほとんどの農家は海洋博反対、皇太子来沖反対だった。革マルは動かない、議会政党も主要組合も動かない。しかし沖繩は熱い夏になる、と予感した。

僕らは戦旗派と沖解同の沖繩現闘団を残していったん地元に戻つた。沖解同は、沖青委から新たに分離した部分と旧沖青同の一部が合流してできた在「本土」沖繩青年の組織「沖繩解放同盟(準備会)」のことである。「本土」

7・17直前の戦旗社での会議で、「ウラはやらない」という方針が下ろされた。それは日和見だと食つてかかる者もいて論争になつた。社での盗聴を織り込んでの「内部デマ」である。

僕らは大挙して(といつても数十名の規模だが)東京竹芝橋からフェリーに乗り込んだ。二泊三日の行程となる。大波に揺られ、吐く者が続出した。食事は僕の母がカンパにくれたフランスパンがもっぱらで、食堂は一度しか使わせてもらえなかつた。警視庁から派遣された機動隊が同船していたのである。竹芝橋から、すでに戒厳令下におかれていた。那覇に着くと、厳しい検問が待っていた。検問の間中、何度も殴られた。私服刑事はナンチャクを脇に抱えて威嚇した。那覇に着いたのが何日だったのかは覚えていない。覚えているのは、何日か宿泊が学校の体育館だったこと(もちろん布団はない)、食事は一日三食が食パンと牛乳、最後は腹は減つても喉を通らなかつた

こと、等である。この食事はつらかつた。兵站のセンスがなかつたとしか言えない。

七月十七日は、糸満から那覇まで八キロのデモ。ヘルメットでは暑くて無理なので、麦わら帽子を被つた。どれだけ暑かつたかという、油性マジックで書いたゼッケンの文字が汗で滲んだといえれば想像できるだろう。それでも治道からの拍手や声援に元気づけられ、那覇までついた。市庁舎前でシュプレヒコールをすると、汗が飛び散るように噴き出す。午後、沖繩大学の教室に着いてぐったりしていると、全国委にはオレンジが配られた。僕等には水も何もなし。兵站がないのではないかと思つた。皆脱水状態だった。

オモテ部隊の指揮者から「車へ行け」といわれた。「皇太子が上陸したんだぞ、何が起るかわからないじゃないか」と。乗用車へ行つてニュースを探しチャンネルを変えていると、アナウンサーの上ずつた声。「赤ヘルには反

では沖解同を支持する統一戦線が、戦旗派と共産同(全国委、今は戦旗派と合同して「統一委」)、労働・労活評、中核派から分派した海燕社、ブント系ノンセクトなどで形成されていた。

東京で僕は6・23摩文仁が丘決起を知ることになる。摩文仁が丘は沖繩戦で「皇軍」司令官が自決し、もつて戦争が終結したとされる地だ。「本土」各都道府県の慰霊碑が立ち並び、「聖地」扱いはされている。その路上に「海洋博粉砕」「皇太子上陸阻止」「戦犯天皇糾弾」等のスローガンがペンキで大書されたのである。「摩文仁が丘決起に続け」が共通のスローガンになった。

皇太子の沖繩上陸は七月十七日と決まった。僕等は、それまで「海洋博粉砕」「皇太子沖繩上陸阻止(この言い方は、「本土」からすれば「訪沖」、沖繩からすれば「来沖」を共同して一体的に闘うという意味が込められている)」「戦犯天皇糾弾」を「実力」で闘うという意志を表明してきた。学生の会議では

帝戦線と書いてあります。そして黒ヘルには沖繩解放と書いてあります。今、ひめゆりの塔で皇太子殿下に火炎瓶が投げられ、二人が取り押さえられまし「た」との放送。びっくりして教室に戻り、指揮者に伝えようと、ニヤツと笑つて演壇に進み、「同士諸君、今、皇太子がひめゆりの塔を参拝した(ナンセンス!)の声)。ひめゆりの濠から飛び出した沖解同とわが日本反帝戦線の同志が火炎瓶を投げ、これを糾弾した」と報告、満場の拍手が起こつた。喉の渇きは一気に失せた。

白銀闘争についてもこの日に聞いた。皇太子がひめゆりの塔に向かう車列に、沿道の白銀病院から「入院患者」の沖解同と戦旗派の二人が石や空き瓶を投げつけ、ナンチャクを振り回して突入していたのだ。ひめゆりの闘いととも

僕のデッチ上げ逮捕

翌一八日は本部半島の名護で集会



「本土」人民の血債かけ
皇太子摩文仁参拝を徹底糾弾!!



沖繩解放の未来かけ
われら皇太子糾弾に決起

皇太子の空涙を許さず、皇太子の責任を徹底追糾弾状

声明
沖繩戦の聖戦化を許さず、皇太子
上陸を決死糾弾す!!

が開かれた。市内までのデモ。僕はデモ指揮を担当していた。デモの途中でブント系ノンセクト二名が逮捕された。僕は前日にひめゆり—白銀闘争をやっているの、これ以上逮捕者を出す必要はない。ジグザグデモは極力抑えて逮捕者を出さない方針で臨んだ。無事、解散地の公園に着いた。旗を畳み、ヘルメットをしまい、ゼッケンも外してバス停に向かおうとした。ところが、である。公園の出口に機動隊は阻止線を張り、僕らを出してくれない。「バス停に行くんだから通してくれ」と何度も言ったが、機動隊は無反応。挙句、奥にいた機動隊が「公妨!」と叫び、僕は機動隊の中に引き込まれ、デモ隊の最前列にいた二人が僕の腰を抱えて逮捕を阻止しようとしたため計三人が「公務執行妨害」で逮捕された。明らかに、ひめゆり—白銀闘争への報復弾圧である。名護署に着いた時、私服刑事は言った。「全部で五人か。予定通りだ」と。名護署は事前に

収容者を全員他の留置所へ移し、空の状態待ち受けていた。でっち上げに對する怒りはあつたが、報復を食らうような闘いをわれわれがやったという「自負」の念が大きかつた。ノンセクトの二人は釈放され、戦旗派の三人が起訴された。接見禁止が三カ月もつた。長期戦になるなと気持ちには定まっていた。

名護署では看守がよく話しかけてきた。年配の看守は、「私もね、海洋博は来ん方がよかつたと思うよ。いいことないさ」と言った。八月末頃まで名護署にいたと思う。その後コザ署に移された。

コザ署ではある時、僕と同年、二〇歳の黒人が傷害罪で入ってきて同房になった。沖繩人の奥さんを殴つたのだという。彼は日本語もウチナーグチも話せず、一方の僕は英語は高校時代ずっと赤点で受験勉強もしなかつたから英語が分からない。しかし幸い、他の二人の仲間は国立大学の学生。大声

で「〇〇つて英語で何て言うの?」と聞けば教えてくれる。黒人の名はS。Sは、アメリカでの黒人差別をとうとうと話してくれた。バスもレストランもトイレも、どこでも白人用と黒人用に分かれている。黒人は白人と同じにはなれない。差別がある、と。白人と黒人の関係は、日本と沖繩の関係に似ているとも言つた。「だったら沖繩の奥さんを殴つたらいけないだろう」と言う、と、しきりに反省し、二度としないと約束した。Sは中国に行きたいと言つた。中国はみんながセイムセイム(平等)だ。服も同じものを着ている、と。当時の中国では国家主席も「人民服」を着ていた。服の造作で違いがあり、庶民のそれとはおよそ違つていたのだが、人民服は「平等」の象徴だつた(因みに、中国は当時「反帝反社帝」を掲げて帝国主義とソ連に反対しており、沖繩海洋博にも人民の反対が多いという事で参加を見送つた経緯がある)。差別されるがゆえに平等を求め

る、その構造に思いを巡らした。沖繩の島ぐるみで闘われた「祖国復帰運動」の根底にも同じ構造があつたのかもしれない。米軍政の差別軍事支配が厳しかっただけに、「本土」との平等!!「核抜き本土並み復帰」、平和憲法を求めたのだから。

那覇署に移つた。ここでは食事がまづかつた以外に特に記憶はない。起訴後も代用監獄制度でここに留め置かれた人が多く、拘置所に行けば天国だ、とよく聞かされた。食事は、キャベツが入っているのかいなのかわからないくらいのスープと麦飯が毎日。

一〇月によくやく拘置所に入った。接見禁止も解除、救援の人間が面会に来てくれて7・17の詳細を聞くことができた。

拘置所生活と裁判闘争

那覇市にあつた沖繩拘置所は日本が終戦前に建てた煉瓦造りの建物で、刑務所に付属している観を呈していた。

入所時には栄養失調と診断されたが（留置署のせいだ）、出所時には問題なしであった。それだけ栄養管理が行き届いている。食事は麦飯だが、おかずが毎日替わる。正月三が日は銀シャリとおせち。なぜ銀シャリと呼ぶのかもわかった。毎日黄色い麦飯をたべていると、白米百パーセントのご飯は眩しいくらい銀色に輝いて見えるのだ。

拘留所では本を読みまくった。官本はマルクス、エンゲルス、レーニン、毛沢東など左翼の基本文献が揃っており、さらに沖繩拘留所（刑務所）らしく、沖繩の歴史、沖繩戦の資料などが充実していて、これらを貪り読んだ。

裁判も始まった。検察の描いた筋書きは、デモを終えた公園から今度は無届の違法デモに出ようとしたので阻止した、そこで僕が機動隊を殴って公務執行妨害、他の二人は僕の逮捕を妨害した公務執行妨害だ、というものであった。焦点は、公園を封鎖したことが正当な「公務」にあたるかどうかにあった。

人は僕の逮捕を妨害したという公務執行妨害で変わらず。僕の訴因変更は、公園での規制が正当な公務に当たらないことを認めたもので、不当規制を「違法」とするものである。「暴行」は、機動隊など特別公務員に対しては公務執行妨害の一構成要件をなすにすぎず、通常それだけで成立するものではない。とってつけた「罪」である。だから過剰警備が公務にあたらなかつたことは実質的に勝訴といえる。

血債の思想

当時、僕らが立脚点としていたのは「血債の思想」である。血債とは、もともと中国の魯迅が日本軍による虐殺に対して血でもって支払われなければならない債務と呼んだことに由来する。一六〇九年の薩摩侵略以来、「ヤマト」は沖繩を隷属させ、植民地的に扱ってきた。その極みが沖繩戦である。沖繩は「本土」の捨石にされた。苛烈を極めた沖繩戦では住民の実に四人に

た。横断幕も旗も畳んでいる、ゼッケンもヘルメットもしまっている、何もつて無届デモに出ようとしたと判断したのか。「バス停にいくんだからどいてくれ」という僕の声を、（僕が殴つたという）沖繩機動隊の証人も聞いたと認めた。横断幕も旗もゼッケンもヘルメットもしまつた状態は、機動隊の全証人が認めた。さすがに裁判長も首を傾げ、「なぜ、無届デモに出発しようとしたと判断したのですか？」と機動隊に疑問を呈する有様に。

僕が殴つたとされる件は、大きな争点にならなかつたが、弁護士から僕は右利きだから殴つたとすれば左頬ではないか、診断書に右頬が痛かつたというのとは矛盾する、との指摘があり、僕が右利きである証明もおこなつた。機動隊は言葉を失つた。そこへ助け舟を出したのが検事の一言、「誤記ですわね！」である。機動隊は意味がわからず答えかねていた。そこへもう一度「誤記ですわね！」。検事に促される

一人が亡くなつた。米兵に殺されただけではない。「友軍」たる日本軍によつても殺されているのである。これはまぎれもないわれわれの「血債」である。僕らは血債にかけて沖繩人民と連帯とした。血債にかけて戦犯天皇を糾弾した。その思想は狭山闘争や日韓連帯闘争にも通底している。

僕らの裁判で出廷した時、手錠と腰縄をつけて拘留所から裁判所まで行き廊下で開廷を待っていた時、拘留所の職員がもらした。「ひめゆりの裁判も聞いた。（沖解同の）知念の言うことはその通りだと思ふ。胸に響いた。（戦旗派の）小林（貢）は知念と同じことを言っているんだが胸に響いてこない」と。「なぜ、ヤマトの君たちが沖繩のためにここまでしてくれるのかわからない」とも言われた。ヤマトに対する根底的な不信任がそこにある。

差別される側・抑圧される側には、常に差別・抑圧する側に対する不信任がある。それはいつときの「連帯」で

ように機動隊も「はい」と答えた。この悪徳検事こそ、その後公明党の代表となり、法務大臣を務めることになる神崎武法である。

最後の被告人意見陳述は、三人で分担し、海洋博の問題、戒厳令の弾圧体制の問題、そして沖繩と天皇制の問題を陳述することになつていった。僕は沖繩と天皇制について、罫紙七〇枚ほどの長大な陳述書を書いたが、いざ読み上げる段になつたら、裁判長から「天皇の戦争責任とかいう話になるのであれば、当裁判所としては聞くわけにいかない、その箇所を飛ばすか変えるかして読むように」と言われた。それでは骨抜きである。返事せず読み始めた途端、「発言禁止！」の声。続けて読むと「退廷！」。「反動的訴訟指揮をゆるさないぞ！」と呼号しながら、外に連れ出された。

翌年二月の判決はいわば妥協策だった。僕に関しては訴因変更で公務執行妨害が取れ、暴行に変わった。他の二

癒されるものではない。この不信任を正面から受けとめ、それでもなおお連帯を求めて血を流すことを厭わないのが「血債の思想」である。

思えば、七〇年代は7・7の華青闘（華僑青年闘争委員会）による告発を嚆矢として、被差別者の糾弾によつて血債が求められるところから始まつた。六〇年代の学園闘争とは異なる質的段階に入ったといつてよいだろう。その後、差別の問題は、単なる政治問題から広く社会的問題として議論され、行動されるようになった。二〇二〇年代がどういう時代になるのかはわからない。だが、少なくとも一九七〇年代を清算したところには展望はないだろうというところは、確言できると思う。六〇年代が一つの時代を作つたように、七〇年代は新たな時代を作つたのである。